

2. 定置網・まき網・船びき網で漁獲される魚種

マイワシ *Sardinops melanostictus*

体の側面に 7 個前後の黒い斑点があり、他のいわし類と容易に区別できます。高知県内では幼魚をギンムシ、カエリ、コベラ、中・大型魚をヒラゴ、チュウバ、オオバなどと呼びます。特にヒラゴという呼び名が一般的です。なお、カタクチイワシのことをマイワシと呼ぶ地域もありますので、注意が必要です。鮮魚として広く利用されるほか、養殖魚の餌としても利用されます。仔魚は冬春季にシラスとしても漁獲されます。



生物特性

高知県で漁獲されるマイワシは太平洋系群に属します。1 歳で被鱗体長 17cm、2 歳で 19cm に成長します。寿命は 7 歳程度と考えられます。近年は 1 歳で約半分が成熟します。産卵期は 10～5 月で、その盛期は 2～3 月です。近年の産卵場は土佐湾が中心となっています。なお、大規模な資源変動(後述)にともない、成長や成熟年齢、産卵場が変化することが知られています。

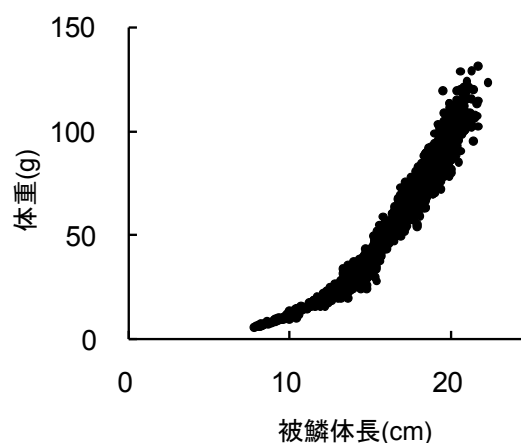


図1 高知県産マイワシの被鱗体長と体重の関係(平成17年～22年の測定データに基づく)。

資源動向

マイワシは数十年の規模で大きな資源変動をする魚として有名です。最近では、1980年代を中心とした資源の増大期があり、この間の資源量は1,400万～1,900万トンで安定していました。その後、平成元年(1989年)から資源量は急減し、1990年代は数十万トン台で推移しました。2000年代にはさらに減少が進み、平成14年(2002年)から平成19年(2007年)までは10万トン台で推移しました。平成20年(2008年)以降は増加傾向もみられ、平成21年(2009年)当初の資源量は20万トンと推定されています。平成22年度の資源評価では、マイワシ太平洋系群の資源水準は「低位」、動向は近年の調査結果から「増加」傾向にあるとされています。

マイワシの資源変動は、レジームシフトと呼ばれる数十年規模の気候変動によって引き起こされると考えられています。レジームシフトにともない、日本近海は温暖な年代と寒冷な年代が交互に現れます。マイワシは寒冷な海の年代では増加し、現在のような温暖な海では減少する傾向があります。

県内の漁獲動向

マイワシの大規模な資源変動を反映し、高知県内の漁獲量にも大きな変動がみられます(図2)。1980年代に漁獲量は増加し、昭和59年(1984年)には23,667トンのピークを迎えました。しかし、1990年代に急減し、平成5年(1993年)には5,000トンを下回りました。その後はおおむね5,000トン以下で推移しています。平成19年(2007年)には漁獲量が8,850トンに増加しました。これは宿毛湾で0歳魚が一時的に多獲されたことによるもので、翌年からは再び低水準の漁獲量となりました。

マイワシは、主に宿毛湾の中型まき網と、各地の定置網で漁獲されます(図3)。宿毛湾の中型まき網では、10月～翌年3月までが主な漁期です。また、7月にまとまって漁獲されることもあります。定置網では、秋～春にかけて漁獲されます。両漁法とも、夏は漁獲量が少ない傾向があります。

冬から春にかけて、土佐湾内のシラス漁でマイワシのシラスが漁獲されます(シラスの項を参照)。その後、春から初夏にかけて、7cm程度の0歳魚が定置網に入るようになり、秋以降にはさらに成長した0歳魚がまき網や定置網で漁獲されるようになります。年が明けると、これに加えてより高齢の産卵親魚(19cm以上)も漁獲されます。これらのことをふまえ、高知県水産試験場では春から初夏の0歳魚の出現状況や、近県の漁況などから漁況予測を行っています。

かつて資源が高水準であった時代には、マイワシの産卵場は紀伊半島沖から薩南にかけての黒潮流域に広く形成されていました。ところが、資源の減少に伴い産卵場が縮小し、低水準期となった近年の産卵場は土佐湾を中心としたごく限られた海域となっています。ウルメイワシの主産卵場も土佐湾ですので、いわし類にとって土佐湾がきわめて重要な海域であることがうかがえます。

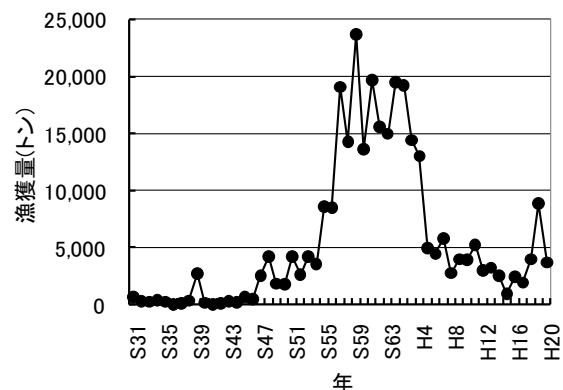


図2 高知県下におけるマイワシ漁獲量の推移。

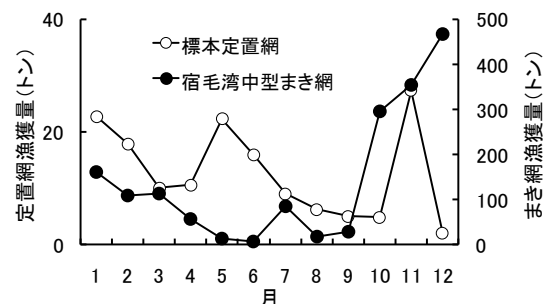


図3 標本定置網と宿毛湾の中型まき網によるマイワシの月別漁獲量。平成11年～平成20年の平均値で示す。